

さすらい人の宝物

神奈川県平塚市 川合 慶一

編集部 註 (川合さんからいただいた原稿は膨大な量ですので、一部割愛して掲載させていただきます)

(前略)今回は、私が1991年のメキシコ、1994年のブラジルで試みたコロナの定量的スケッチの考案者であり、常日頃いろいろとご指導いただいている平塚市博物館の庵宏道氏に、博物館のプラネタリウムの音楽や番組制作で活躍している法政大学院生の三橋裕之君と一緒にお供させていただきました。プラネタリウム投影の都合等で10月23日出発、27日帰国という苦しい日程となり、まず観測地をタイのナコン・ラチャシマ周辺の皆既帯内にある町のどこかと定め、平塚の天体観察会会員のついでに旅行社に成田～バンコク間往復及びバンコク～ナコン・ラチャシマ間片道の航空券と25日夜アユタヤ、26日夜ドン・ムアン空港近くのホテルを押さえてもらいました。ナコン・ラチャシマ周辺のホテルはわかる範囲では既に満杯とのことでしたので、皆既日蝕の前夜と当日の宿は自力で確保することになりました。(中略)

出発の日はたちまちやってきました。朝5時過ぎに家を出てまず庵氏を、そして三橋君を迎えに行き、湾岸線経由で成田へ向かいました。朝焼けの中に水星が明るく光っているのが簡単に見つかるほど美しく晴れた朝でした。明日のタイでもこのくらい晴れてくれたらと願いつつ、期待はふくらみます。

成田を10時発の便でバンコクへ向かいました。目的地が近づきインドシナ半島が眼下に見えてくると、どうしても雲の様子が気にかかります。飛行機の窓からはるか遠くを望むと、積雲状の雲がまだらに大地をおおっていました。かなり広いすき間もみられたので、明日もこの程度ならまあ何とかかなりそだとひと安心です。車での移動が可能というのは層雲状の雲にべったりとおおわれな限りは心強いものです。特に私のように設置や撤収に時間のかかる機材と無縁の観測行では。

ドン・ムアン空港に到着し、まず腹ごしらえをしようということで空港内のレストランに入り、私はトムヤム・クン、庵氏と三橋君はジャングルカレーなるものを注文したのですが、ここで第一の試練が待ちかまえていました。タイの食べ物に口に合わなかったときを考えてカロリーメイトを5日分用意してきた三橋君が、無難だろうと思ってたのんだそのカレーの中に、あの緑褐色の小さな爆弾がかくれているのです。口いっぱいひろがるほこりっぽい辛さに、あわれ彼は一口でスプーンを投げ出したのでした。

国内線でナコン・ラチャシマの空港に着いたときにはもう夕方でした。空港から鉄道の駅までトゥクトゥクを利用しましたが、前後二列の座席は私たち三人と荷物で少し窮屈なほど。おまけに運転手がすばらしいスピードとハンドルさばきで飛ばしてくれたので、曲がり角では今にも振り落とされるのではないかと思うほどのスリル満点のひとときでした。

列車はほぼ時間通りにやって来ました。列車の旅は実にのどかなもので、夜でも車内で焼き鳥やビールなどを売り歩いている親子もいました。窓からは虫も飛び込んできます。窓の外に黒々とひろがる田畑のむこうからアケルナルが昇ってきました。つる座の星やくじやく座 α 星もよく見えています。

バク・チョンの駅に着くと、ホテルからの迎えがもう待っていてくれました。ホテルに着いてチェックインをすませ、明日の車の件などを確認してから、4階の402号室に案内されました。その夜は旅の疲れをいやし、翌日の鋭気を養うためにシャワーで汗を洗い流して早々に眠りにつきました。

翌朝私が目を覚ましたのはまだ日の出前でした。朝焼けの空に雲が少々、恐れていた層雲状の雲ではありません。これなら何とかうまくいきそうです。

朝食(洋風だったので誰も困らなかった)をすませ、観測のための支度を整えてさあ出発です。観測テーマは私が相も変わらずコロナの定量的スケッチ、例のゲーシ入り双眼鏡と三脚、藍色の色画用紙と色鉛筆、それに画板が機材のすべてです。庵氏は皆既中の太陽及び風景の写真及びビデオ撮影なので一番の大荷物です。三橋君は庵氏の助手を務めることになりました。皆既前後の音声を記録すべくテープレコーダーを用意しています。運転手を務めてくれる現地の方も英語がまあ大丈夫とのこと。道中困ることもなさそうです。車もエアコン付きのワゴン車で、当初想像していたの

よりよほどゆったりしています。ホテルで朝食を作って持たせてくれました。

バク・チョンの町は皆既帯の南限界線寄りなので、できるだけ中心線近くの継続時間の長い所をめざして、町を通っている国道2号線をはるか東北東のナコン・ラチャシマに向けて走りだしました。山あいにある美しい人造湖のほとりを抜けたあたりで渋滞が始まりました。このあたりがかなり好条件ということもあって、皆既日蝕をひと目見ようとバンコク方面から多くの人が集まってきたようです。道の両側の空地や店のある所にはすでに多くの観測者が陣取っていました。途中の小さな町にある歩道橋には皆既日蝕の横断幕が張られ、ひととき広い空地には立看板が何枚か立てられ、ざっと見渡したところ千人近いのではないかとという人でにぎわっていました。

渋滞がひどくなった頃から高積雲が現れ、空の半分くらいを覆うようになってきましたが、それに加えて南東方向に連なる低い山の向こうから積雲が次々に現れてくるようになり、山あいは雲が発生しやすいのでできるだけ避けようとかねて心配していたことが現実味を帯びてきました。しかし立看板のある広場を過ぎたあたりから、東へ向かう側の渋滞は徐々に解消してきました。今まで走った距離からして、もうしばらくで開けたところに出られるはずですが、まもなく部分蝕の始まる時刻ですが、あせってもどうなるわけではありません。

ようやく山あいを抜けると、あたりの景色が急に開けました。高積雲の雲量もぐっと少なくなり、積雲の塊もずっと小さなものになりました。この先のインターチェンジを直進すればナコン・ラチャシマ、右へ折れて国道24号線に入ればバク・トン・チャイやチョク・チャイ方面です。するとさっきの広場はほぼ皆既中心線上にあたるのでしょうか。直進すると今度は北限界線に近づいてしまうので、国道24号線沿いに観測地を求めることにしました。地図で見るとシ・キウ (Si Kiu) という町の近くです。

もの数分と走らないうちに、左手に大きな空地があり、何隊かがすでに機材の設置を終えて観測を始めていました。かなり大がかりな機材もみられます。見ると、その反対側にも広々とした空地が広がっていますが、そちらには一組の家族連れのほかには誰もいません。もう部分蝕も始まっています。視界もよく、雲の心配もますますなさそうに思われたので、そこに落ち着くことに決めました。空地に車を乗り入れてもらい、機材を降ろし、家族連れにあいさつをしてから鷹氏はビデオとカメラ、私はメキシコそしてブラジルでも使った双眼鏡を三脚にセットしました。そこは自然の地面でなくどこから土を運んできて平らにしたようでした。あたり一面に表れているレンガのような色をした重い感じの土の上に、軽くて流れやすそうな白っぽい土がかぶっているところがあります。私たちが陣取ったのは白っぽい土の上でした。理由は、シャドウバンドが見やすいはず、という鷹氏のひと言でしたが、これはたいへんな先見の明でした。

機材の据え付けが終わってから太陽が欠けていく間の一時間弱は、実ののんびりしたものでした。私たちの隣ですすをつけたガラスを用いて欠けた太陽を見ている家族連れと英語で話をしたり、皆既日蝕は初体験の三橋君にこれから起こるであろう様々な現象についての体験談を聞かせたり、途中で一度だけちぎれ雲が欠けた太陽の顔を横切りましたが、地平線近くの遠い雲のほかは飛んでくる雲もなく、緊張感にとられることもありませんでした。しかしさすがに太陽の姿が三日月のように細くなってくると、視覚以外にもあらゆる感覚をもって現象のすべてをとらえようとするかのように、全身の毛が逆立ってくるような緊張感を覚えるようになりました。金星が姿を現し、数羽の鳥が北東に向かってあわてたように飛んで行きました。第二接触まであと5分です。

背後にあたる西の地平線近くの雲が黒ずんできました。比較的一様に青かった空は、地平線近くが雲雲の出た日の夕方のように黄色く、それより高いところは澄んだ深い青に変わり、物影が薄く輪郭がぼやけているのがはっきりわかります。三日月型に欠けた太陽の両端が見る見る短くなり、一点に近づいてきました。太陽から見て金星のちょうど反対側に星が一つ現れました。水星です。欠け残った太陽の反対側からコロナがまるで煙のように姿を見せ始めました。もう太陽は点です。黒い月の輪郭がコロナの光で自然に浮かびあがって見えます。背後の空は異様な暗さです。地平線近くの薄明かりにやや赤みがかかってきました。ちょうど月の深い谷でもあったのか、それとも時間の流れが遅く感じられたのか、太陽が点になってから完全に隠されるまでがすいぶん長く思われました。

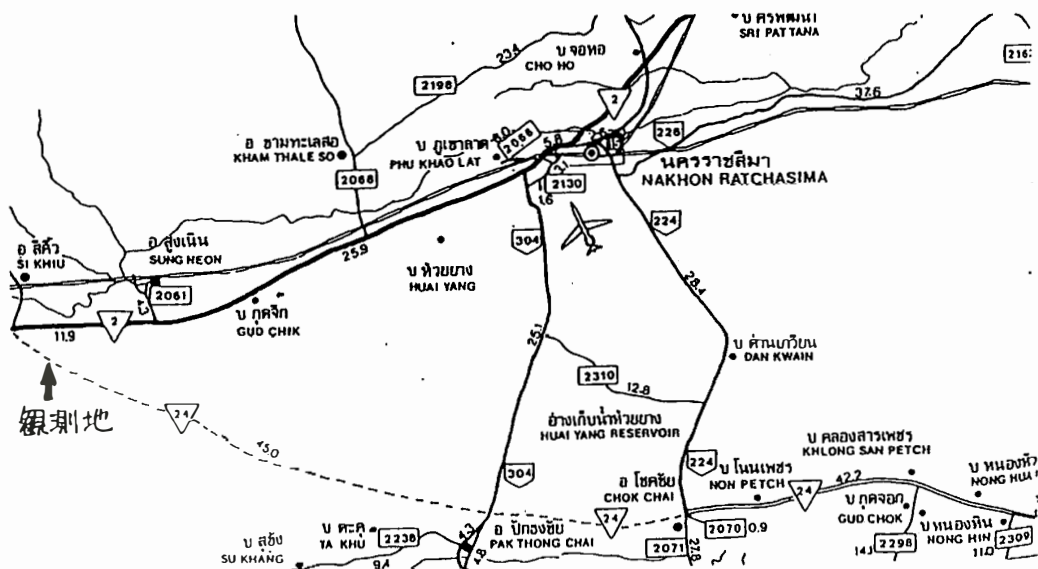
皆既になりました。コロナは極小型といわれていたのに太陽のまわりにまわりついたような姿です。空はかなり暗いようなのに金星と水星のほかには星は見当たりません。皆既の継続時間が前回と比べても半分以下なので、何が見えるかがあまり丁寧さがす余裕がなかったせいもあるでしょ

う。南東の空低いところにある木星は、地平線近くの雲にさえぎられて見えません。木星が見えていないのを確かめてから太陽に再び目をやると、目が暗さに慣れてきたためか、ほぼ水星と金星の方に向かって長く伸びたみごとな極小型のコロナがはっきりと見えてきました。私は双眼鏡をのぞき、あらかじめ白鉛筆で双眼鏡の視野に見えるのと同じ形のゲー지를書き込んだ藍色の色画用紙をはさんだ画板と、白鉛筆を手に取り、コロナの流線の方向、長さ、幅、形を一気に線で描き、明るさと色については形をほぼとらえたあとで別に記録しました。用意した色鉛筆は硬質色鉛筆の白、紅のほかは「色辞典」というシリーズの中の淡色のセットから黄～緑～青系の色を何種類か持ち出しました。

双眼鏡のゲー지의十字線の縦方向は、太陽の日周運動の向きに合わせておいたので、コロナは北西～西北西と南東～東南東に太陽半径の7倍あたりまで延びているのがすぐにわかりました。プロミネンスはあとで写真を見ると出ていたのがわかりましたが、スケッチをとっている間はどうとう気がつきませんでした。コロナの明るさはどこがどのくらい、色はごく内側がわずかに黄色または黄緑色を帯びているようだ、などを記録したあとで、コロナのもっと細かい形状についての確認作業を始めてしまったためでしょう。

コロナのやや小さな構造を記録してから双眼鏡から目を離し、中天にかかる黒い太陽を見上げました。コロナの形状をとらえるという目的はほぼ達したと思ったのでずいぶん気が楽になりました。黒い太陽の西側はすでに明るみかけていましたが、コロナの様子も、二つの惑星もまだそのままです。最も内側のコロナの明るさは、ブラジルのときよりも明るく見えます。器械を使わずに見たコロナの印象を、つい今しがた器械を通して記録したコロナの印象に頭の中で重ね合わせて、この時点で気づくほどの食い違いが無いことを確かめました。さっきから時間の流れがゆっくりになったかのように、2分にも満たないわずかな時間に、いろいろなことができたと思いました。でもさすがにもう終わりでしょう。何事にも追われずもう一度じっくりとコロナを見たくなり、顔だけでなく体も太陽の方にまっすぐ向けました。それからさらにしばらくの時間が与えられたのは、全く幸せというよりほかありませんでした。

水星の側に延びたコロナのもとのあたりから、まぶしい光がさし始めました。ダイヤモンドリングの瞬間です。光のさした側のコロナはたちまち消え失せ、反対側の金星に向かって延びたコロナの光の束はすうっと短くなりました。しばらくその状態が続いたあと、光の点がさらに明るさを増すにつれてコロナの光は薄れ、ついには空に溶けるように見えなくなっていきました。コロナが見えなくなるのと、水星が姿を消すのとはほぼ同時だったように思いました。鷹氏の声で振り返ると、白い土の上をシャドウバンドが逃げるように動いていくのが見えました。もし赤い土の上にといたらこれほどはっきり見えなかったでしょうから、見逃したかもしれません。観測経験豊かな鷹氏の、ちょっとした条件の違いを生かした配慮のおかげで、私は一つ多くの現象を体験することができました。再び振り向くと、点だった太陽は、少しずつ三日月型になり始めていました。そしてそのすぐど左下には金星が、まるで自分だけ取り残されたかのようにまだ白く見えていました。(後略)



ゲージ入り双眼鏡によるスケッチ

